

Reischauer 教授の Ennin's Diary

「英譯入唐求法巡禮行記」について

小 野 勝 年

ハーバード大學のライシヤウワー教授の近業 Ennin's Diary 及び Ennin's Travel in T'ang China についてかねてうわさには聞いていたものの、この程ようやく天理圖書館鈴木治氏の厚意で披見することが出来たのは感謝にたえない。申すまでもなく、教授は東京の生れで、オベリン大學卒業の後、パリ大學や東大・京大などに學び、中國・朝鮮などにも遊び、その後數種の論著などもあり、日本古代文學および極東史の權威として、わが國の東方學者の間に知られている學者である。もれ聞くところでは本書が教授の學位請求のためのものであったという。Ennin's Diary は求法行記の完譯であつて、これに脚註をほどこし、索引なども付したものの。

Ennin's Travels in T'ang China はこの翻譯を基礎として出来上つた研究をとりまとめたものである。後者の内容は先づ、マルコ・ポーロ、玄奘、成尋などの旅行記と比較して求法行記の解説を行い、著者慈覺大師の傳記を述べ、入唐の經過を語り、唐における求法の有様や彼の地の官憲との接衝を明かにし、在唐十餘年にわたる生活や唐土の風俗習慣、或は當時の佛教事情、さらに會昌の排佛や唐に

おける新羅人の活動などなどについて記し、その歸朝のことに及んだ主として一般的課題をとりあげたものである。前者は出来る限り刻明な翻譯をほどこしたものであつて、固有名詞のごときも、日本風、中國風および朝鮮風、さらに事柄によつて梵語などに置換えるなど、それぞれに應じて氏の該博な知識を活用すると共に、行文中難解のものに對しては一々考證を加え、自己の見解のみならず、廣く典據を抄録し、忠實に先學の關係論文をあげ、それでも遂に譯しえざるところは必ず明確に脚註に斷っているなど、その學的良好を示めすに充分なものがあつて、しかしてまたこの書が短期間の著作とは相違し、かなりの年期とたゆまざる努力とになるを窺わしめてゐる。その結果、所謂「先人の幽光を發揚し」、廣く世界に對し、慈覺大師と同時代的背景を紹介せられたものとして、その業績は當然高く評價せらるべきものがある。たまたま自分も求法行記に對して年來少なからざる關心と興味とをいだいてるので、期待をもつて本書を一讀し、多くの示唆や利益を得ることが出来、その苦心についてもいさゝかの理解を持つてゐると自負している。したがつて教授

の成果に對しては心からなる讃辭を呈すると共に、斯界のために大いなる喜びとすることは人後におちない。

しかし、徒らにこのような讃辭に終始するのみでは固より、著者の本意ではあるまい。そこで讀過の際、氣付いた翻譯についての若干のことがらに關してこれを指摘することもあながち無意味ではないと思ひ、自ら拙りずも記してみることとした。

一、(三・七・二四) 西池寺講起信論座主謙云々を The Hsi-chih-su held a lecture on the Kishiron. The Abbot was... (p. 21) としてゐるが、これは西池寺の講起信論座主の謙とすべきであつて、同様に惠照寺の廣約についても法花座主とあるのは(三・九・一九) 講法華經座主の略であつて、これを an Abbot of the Tendai Lotus Sect. (p. 40) とするのは如何かと思われる。

一、(三・八・二九) 空飯 “empty meal”……indicate that this is a substitute term for sai. (p. 34) と註してゐるが、空飯と齋とは要するに同一であつたとしても、空の義は空首拜ということであつて、後文の空茶なども同様、敬んで差上げる食事という意味である。

一、(三・一・二九) 惠雲法師 Presumably the Chi'ang-an monk of this name mentioned on X 14. (p. 60) と註してゐるが、實はこの惠雲は鑑眞に從つて來朝した人で、日本律宗の第五祖、四國屋島寺の開基となつた僧を指し、千福寺の惠雲とは同名異人と解される。

一、開成四年二月八日から十四日に到る間の錯簡についてはすでに氣付かれ、註記してはいるものゝ、未だ原典に對する復舊を試みていない。私見によれば、八日の記事は仍深夏悵者で終つていて、第四舶射手以下、廿一日・廿二日・廿三日・廿四日・廿五日・廿六

日および廿七日の條の請益法師、不許往台州、左右盡謀、遂不被許、是以歎息者までの記事が廿八日の條の前に置かるべく、しかしてこの文に續く十四・十五・十六此三箇日は寒食日より十七日・十八日・十九日の條すなわち大座主寄上天台山書一函并衲袈裟及寺家未決・修禪寺未決等並分付留學僧既了までが仍深夏悵者に續くのである。かく錯簡を正すことによって前後の記載の意味がよく通ずるのである。從來の刊本も未だその點が明確にされてゐないので先般「大和文化研究」紙上に觸れてゐた(三・二)。

一、(四・二・二〇) 東郎水門を Tung-lang Water Gate (p. 83) としてゐるが勿論揚州の東郭水門のことである。後文に東廊とあるもまた東廊の誤。

一、(四・二・二六) 同十將について simply a copyist's error (p. 86) と註してゐるが、十將とは唐宋時代主として地方、ことに節度使などに屬した下級將校の名稱で、同十將もまた、時々記錄に見えてゐる。これはいわば準尉に當るものであろう。

一、(四・二・二七) 甘堂驛についてもまた註して、might be Kan-t'ang 甘堂 in the neighborhood of I-yang 宜陽 on the Lo River west of Lo-yang, but I cannot identify T'ien-chou 塢 (p. 90) と述べてゐる。甘堂驛は宜陽より寧ろ陝州城内に比定すべきである。塢が果して陝の誤りであるか否かを確證する材料を持合せていないが、これについては更に考究して見たい。

一、(四・三・三二) 无行は義眞の別名 (p. 95) ではなく最澄の高弟の一人として最澄傳などに見え、その眞蹟と考えられるものが三井寺藏三聚淨戒示に残つてゐる。さきに「五臺山」でかく註したのをそのまゝ引用してゐるが、これは失檢であるから訂正する。

一、(四・三・二二) 大坂腰帶 *Osaka may indicate the place of manufacture in Japan, but one cannot tell which Osaka is meant* (p.94) と註している。大坂腰帶とは大坂石を用いて飾りとした腰帶のことであって、觀世音寺資財帳などにも大坂石を用いて作った腰帶の記載がある。延喜式には大坂沙の名が見え、これは河内の大坂山で、金剛沙のごとき性質のものだとのことである。大坂石と大坂沙が同一地方の所産であるか否かについては大方の示教に俟つこととし、こゝではしばらく美麗な石材の名と解し度い。

一、(四・三・二二) 越智貞原の倭人の飛喪のため、甌稻益が月内を限って本船に乘るを許されなかつた記事に註して *Presumably the act had made him ritually impure.* (p.95) と説明している。譯文に飛喪(*Tobimo*) についての説明話のなすのは恐らく脱落であろう。想像をたくましくするならば、實は急死の原因が兩人の間に起つた傷害事件の結果であつたのではあるまいか。かくてその乗船不許可も恐らく刑法的原因によるものと解すべく、單なる ritually impure のためではあるまい。

一、(四・三・二三) 大使倭近江博士家繼を *Ambassador's attendant, the Ōmi Professor, Awada no Ietsugu……* と註して *Ōmi* 近江 *presumably was Ietsugu's province of origin.* (p.96) としているが、寧ろもと大使倭從江博士粟田家繼とあつたのが從が近に誤寫されたものと解される。江博士は惠博士なども書き繪(畫)博士に當るのであつて、家繼が近江の出身であるがために近江博士といったこととは恐らく根據のないことである。平安初期における注意すべき渡航書家のために一言記しておく。

一、(四・四・二二) 挾抄を *Possibly meaning a scribe or servant.* (p.119) と解するは誤り、かじとりと訓むべきである。

一、(四・五・二) 註に綴續と來續とを同一のものとしてゐるが (p.120) 如何であろうか。兩者ともこの時代の實例はないが、正倉院には奈良時代のものが多く残っている。後者は一に綴續とも書き、その技法はなおはっきりしていないが、裂地を二つ或は四つ折りして模様を彫り抜いた二枚の板の間にはさみ、染料を注いで染めたものと解されている。前者は一に目交(めゆい)ともいひしぼり染であるから、その技法は異なる。

一、(四・五・二八) 石神振鳴。石神に註して *meaning the thunder-god, presumably because of the identification in Japan of certain stones, particularly neolithic weapons, with thunder-bolts.* (p.128) しかしこれは國文學における、いそのかみふる云々という振るの枕詞を漢文風に現したものである。従つて直接には石神は大和の石上神社をさし、石(いそ)は磯に通じ、波浪の磯に荒れ狂う有様を形容したものに外ならない。もっともこの石上神社のはじめが石器時代の武器と關係のあるなしについてはしばらくふれないこととする。

一、(四・九・二) 將理不得所由恐動者も亦頗る難解である(p.148)。しかし前文から續けて、謹みて格を檢するのに、僧尼の頭陀を行ずるものの、州縣に到るもの有らば、安置してもって理むるに任かせ、所由(役人)をして恐れ動かしむるをえざれよといえりと讀むならば意は少しく通ずるであらう。

一、(四・一一・二二) 壽尙書(p.155) とあるは韋尙書に改むべく、當時の青州節度使韋長のこと、彼のことは唐書・全唐文にもある。

一、(四・七・二八) 郷事老人に() 及び possibly a copyist's error for *hsiang ch'i-liao* 郷耆老 (p.139) と解してゐる。しかし前後の關係から「帖」郷、事差人「勘事由」とすべきで、老は差の誤寫と見做し、郷に帖(=牒)し、事差人を差して事由を勘らべしめよと讀むべきであろう。

一、(四・九・三) 告示畜取狀州狀上者 (p.144) は註のように頗る難解で、恐らく誤字か脱落があるのであらう。但し、畜は遊方傳義書本のように審と解するより、むしろ當の誤りとすべきではあるまいか。ちなみに告示は前句に續き、こゝに句點が打たるべきである。

一、(五・一・二二) 謹空 originally meaning that a blank space had been left at the end of the letter to permit a simple reply, ……(p.162) と説明している。しかし空は空飯の場合と同じく空首拜の義であつて、頓首など、いうに同じ。

一、(五・二・二八) 開成五年二月二十八日の村人於堂前、同齋各自成と此開元寺宿との間に錯簡があり、これを正して讀む必要のあることはすでに拙文(入唐求法巡禮行記研究概報「大和文化研究」三ノ二)に述べたごとくである。かくて法雲寺を萊州府志の記錄に従つて維縣の西五十里にもとめる岡田博士の説を採用すること(p.180)は何等根據のないことである。法雲寺は臺村すなわち今の牟平縣件臺集にあった寺院である。果してならば、若し件臺集に到つて搜すとき或はそこに王行則の碑文を再び見付け出すことが出来ることになるかも知れない。

一、(五・三・一四) 中李村 (p.188) 地圖を按ずるにこの附近に平李なる地名が存している。かくて中は平の誤りと解されるのである。

一、(五・三・一七) 家婦嗔怒、夫解扑戲を The lady of the house

reviled us, but her husband explained that she was making a joke. (p.191) と譯するは稍々原意と遠いものがある。扑戲とは拳をしてあそぶことで、家婦のとなりちらしたことも必ずしも圓仁の一行のみに對するものと決つたわけでなく、その夫の遊び人であることに向つてであつたとの解釋を挟んでみる餘地がないのではない。

一、(五・三・二五) 先賜一中 (p.196) 一中の意味するところ同様解釋に苦しむものであるが、或は一斷中齋の略稱ではあるまいか。この手紙の宛先である張副使は圓仁のために二十三日に六七人の官人と共に齋を修めてゐる。

一、(五・四・五) 不村の不是筆寫の誤りであらうとしてゐる (p.201) 然し地圖によると附近に見阜莊という地名があり、當時この附近が阜村と呼ばれてゐたとの推測も不可能ではない。果してしからば不と阜は音通で一概に誤りとも斷定し難くなつて來るのではあるまいか。

一、(五・四・一) 禹城縣界蕭塘村里甫家につゞく Li Fu probably is a copyist's error for the surname Huang-Fu 皇甫と註してゐる (p.205) しかしむしろ里を村裡村裏などの同音と見て蕭塘村裡の甫家と解した方が穩當であらう。

一、(五・七・三) 渤海僧貞素が靈仙のために書した詩并序は行記中でも難解の箇處である。教授が敢然この翻譯を試みておられるのは敬服に値し、特に「應」公仆而習之の仆を幼の誤りとする點は仲々の思い付きで首肯するに足るものがある。しかし霸業を霸葉の誤りとし貝葉のことに擬せんとするのは如何であらうか (p.261) 霸業とはここでは禪のようなものを指しているのではあるまいかと愚

考し度いのであるが、この點については切に大方の示教に俟つものである。さらに吾信始而復終以下、四月冀洛如一、首途望京之耳のこときも、如一を加一とし、之耳を之日と改めるならば多少通じ易くなるのであるが、これも又切に示教に俟つものである。

一、(五・七・二)古城村の位置について A Ku-cheng is shown just north of the modern town of T'ai-yüan-hsien in Shan-hsi t'ung-chih 2.5 a. (p.267-6) と註して、これを太原縣城の北の古城村に當てている。しかしこの古城村こそ唐の晉陽城の所在地であるから、行記にいうところの古城村は當然別所に求めなければならぬ。古城村の位置を何處に比定すべきかは今のところ結論をえるに至っていないが、現在の古城村と同視すべきでないことは確である。

一、(五・八・一)汾州南行門。觀智院本は南行門となつてゐる。同書によるとこれは衍字誤字などのしるしに用いてゐる。したがって南門と改めるのが正しい。英文は the south Gate (p.840) とあるから譯には何等の誤りはないのであるが校勘の際の注意として蛇足ながら記しておく。

一、(五・八・一五)この店を store と譯することはこの場合適當ではなく、寧ろ店とした方が事實に即してゐるであらう。古今註に店置也、所以置貨藥物也(康熙字典)と見え、一般にみせ(店舗)の意味に用いられるが、唐代には別に倉庫、居酒屋や旅館を意味したことは加藤博士や小川教授が考證しておられるごとくであつて(東洋史研究二二ノ六の五三三—六頁)ことに道路に臨んだ店をもつて行旅の依託するところなりと説明した例が隋書李謩傳に見える。かゝる臨道の旅舎式人寄り場所が中心となりやがて地名化していく例はかなり舊い時代からのことらしく、行記にも某店という宿場名

がしばしば出てきてゐる。

一、(五・八・二九)營幕に註して is presumably an error for 營墓(p.282)とし、幕を墓の誤寫と解してゐるが、こゝに營幕とは野外に軍隊が宿營してゐることを形容したものであつて、營幕の軍隊と讀むべく、譯文に The tomb builders and soldiers stretched out for five li. とつてゐるのは首肯し難い。

一、(五・一二・二五)更則入新年を since we were once again entering a new year.……と譯してゐる(p.296)更則をさらにすなわちと讀んだのであらうが、こゝではのりをあらためたと解すべきであらう。

一、(六・二・二)畫三藏摩頂松樹を摩頂で句切り、On the wall was painted touching the Learned Doctor's head in ordination. The Hsing-fu-su west of the Sung-shu-chieh 松樹街……(p.301—2)と譯してゐるが、三藏摩頂の松樹と讀むべきで、松樹街などといふ街路は長安にはない。こゝに街とは朱雀大街のことである。興福寺は修德坊に存し、朱雀街とはやゝ離れてゐるが、當時長安はこの御道をもつて東西二京に分ち、一に東西街とも左右街とも呼んだ。街西といふは恐らく西街というに同じであらう。なお玄奘三藏摩頂の松の傳説は佛祖統記などにもある有名な話であるが、これで見ると義淨の場合もかゝる傳説があつたものと思われる。

一、(三・六・二八)神濃寺を司農寺という役所名に解することにまた問題がある(p.333)神濃寺は西内にある神龍寺の誤りと考えられ、舊唐書武宗本紀會昌三年六月の條に西内神龍寺災とあるのに該當するものであらう。同書五行志は神龍宮となつてゐるが、宮でなく寺が正しいと思う。

一、(四・九・〇) 宗平太羅天を *Tsung-p'ing-t'ai-lo Heaven* (p.351) とするの如何かと思われる。平には非らず乎で、もと乎或は乎とあったのが誤寫されたのではあるまいか。果して然らば太羅天をすみかとするの義となるのである。

一、(五・三・三) 里氣越著に註して理氣越著としている(p.357)のもまた不適當で、この條も里は黒の誤り、黒衣(僧侶)の氣が黃衣(道士)の氣に勝ることを述べているのである。

一、(五・五・一六) 留期分は留斯分の誤寫であるが、それを *stay a while longer* (p.367) と譯するのは如何に讀んだのであろうか。「留まりてこゝに分かれん」と讀むべきである。

一、(五・六・九) 貧祥は貪祥であつて、自分のみ吉祥を貪つて他を拒むの義であらう(p.370)さらに三對行官過道走來(p.370)もまた譯していないが、三組の地廻り役人がおおい／＼とゆくてをさえざりつゝ走つて來たとの意味である。過道は一に喝道とも普通する。喝道とは行列の初に立つて下に下にと露拂いすることである。

一、(五・七・九) 留期を *to keep* に、相期を *later* (p.278) と譯しているが、期を留とむ・相期するなど何れも約束の義と考えられる。以上、瑣々取るに足らぬ事柄について、禮を失するなきやと慎れつゝ、敢て私見を述べてみた。勿率の間の過眼に過ぎなかつたので或は却つて誤解もあつて、それを逆に示教せられる結果となるやも保し難い。さらにまた逐一原文と對照することをおこたり——このことは機會をえて試みたいと欲していることであるが——そのためなお訂正補足を加うべき事柄の残されている點に思ひを懷かしめるものがある。しかし、若し更に多少訂正を加えなければならぬと考えられるような箇所があつたところで、實際は英譯という難事業を

最初に完成された榮光に對しては、そのような問題は大了た欠陥でもなく、痛痒を感じしむるものでもないであらう。教授の眼目とするところは勿論出來うる限りの忠實と正確を期するにあるが、翻譯においても、研究においても筋と大局を誤ることなく、内容の本質を把握した、所謂達意という點では充分の成功を示し、外人の最初の仕事としてはそれでまた充分なのであるからである。

さて、かねて池田本求法行記を調査して見たいと考えていた自分は、さき頃人を介して池田氏に原本の有無を問ひ合はせた。しかるところ、同書は大正十二年關東震災の際、東京ですでに焼失したとの返事であつた。これによつてその實物を披見する機會を永久に失つたことを残念に思う。しかるに教授はこの池田本の性質に就いての批評をばすでに適確に行つていたのである。すなわち會昌元年四月三十日の條において、唐曆では三十日までであるのに、池田本では二十九日となつており、しかも日本曆では二十九日で終つてゐる點を注意し、それに註して

This is one of several small indications that Ikeda, instead of representing an independent transmission of the text, is merely a copy of Toji with certain correction (and an occasional miscorrection) made by a reasonably intelligent copyist. (p.306) と喝破しておられる。この一事を例とするだけでも教授が如何に内容を正確に檢討せんとしてゐるかの片鱗を窺はしめるものがあるであらう。終りに當り本書およびその研究を通じ入唐求法巡禮行記が廣く歐米に紹介され、人々に親まれ、その眞價が愈々發揮されるようになるであらうことは、長期に亘る教授の努力への何ものにもかへ難い酬いであると信ずるものであり、これを喜びとするもの一人著者のみに非らず、地下の大師は勿論のこと東洋學にたずさわるわれわれにおいても亦同様であることを特記したい。